

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 近藤 隼人

インドの二元論を代表するサーンキヤ思想は、ヴァールシャガニヤ (Vg) が著した『六十科論』によって古典体系が確立するが、同書は現存せず、その綱要書である『サーンキヤ頌 (SK)』(6世紀前半)が現存最古の根本テキストである。このような状況下で本論文は、同綱要書に対する最も詳細な註解書『ユクティディーピカー (YD)』(作者不明、7世紀前半頃か)の綿密な解説を中心にして、古典サーンキヤ思想の継承と発展をめぐる諸相を四つの個別テーマのもとで解明している。

第I部序論(160頁余り)においては、サーンキヤ派文献史及びYD研究史が詳細に論じ尽くされ、古典サーンキヤ思想研究に必要な一次資料(写本・版本)と研究書・論文の情報が網羅されており、これだけでも画期的な成果と言える。

第II部本論(400頁余り)は4章からなる。第1章では、唯一の根本原質から多様な心理的、物質的現象への展開を、因中有果説に立って説明する2理論(変容説と顕現説)のうちで、YDはVg派の顕現説を継承、発展させた事実を明らかにするとともに、原因に潜在する未顕現状態から顕現状態への移行の説明において因中無果説への接近を招いたという理論的難点を指摘している。第2章では、サーンキヤが知識根拠として認める「信頼できる言明」の定義に関するYDの解釈を分析し、各分野に通暁した者の言明という幅広いVgの見解を受容しつつも、ヴェーダ祭儀の殺生を批判するSKの反ヴェーダの姿勢に対して、ウパニシャッドの権威を強調するYDの折衷的立場を浮き彫りにした。第3章では輪廻主体の構成要素をめぐるYDの解釈の特質を探り、「ハプラーナ」という特異な概念が古典サーンキヤ以前の叙事詩サーンキヤの段階やウパニシャッド思想にまで遡りうることを、SKの該当詩節の微細なテキスト問題にまで立ち入りながら詳細に論じている。第4章は、不動の精神原理プルシャと、心的、物的事象一切へと転変する根本原質プラクリティとを峻別しつつ、比喩的に両原理の交渉を説明しようとする映像説に立脚したサーンキヤの解脱論の展開を克明に辿り、そこに伏在する理論的困難の克服を図るYDの解脱論の諸相を、仏教のチベット語資料にまで立ち入りながら解明している。また第III部結論に続く第IV部補遺(230頁)では、(A)SKの諸版本の校合テキスト・翻訳、引用情報等、(B)YD批判校訂版全体の修訂・訂正の一覧、(C)難解きわまるYD全体の内容科段、(D)YD中の引用句一覧と関連情報を提示している。

90頁にも及ぶ使用テキスト・参考文献一覧が如実に物語るように、近藤氏は関連資料を網羅的に精査し、かつ原文解説、内容分析、思想史的考察すべてにわたって実に綿密に論を進めている。両論併記を厭わない氏の慎重さは、時に論旨の把握を困難にさせる面もあるが、諸学説の対立の中でサーンキヤ思想の伝統を復権、発展させようとするYDの錯綜した議論の襞を忠実に追跡しようとした氏の誠実な研究姿勢の表れでもある。世界的に見ても最高水準に達しているこのYD研究の力作に対して、審査委員会は博士(文学)の学位を授与するに相応しい傑出した業績として高く評価する。